

平安城象嵌鐔―「牡丹桔梗唐草図」鐔

ききょうよう

―真鍮国産化と近江日野の名工―

はじめに

平安城象嵌鐔の中には名品があり、その1枚を紹介したい。鉄地に真鍮象嵌が施された鐔は平安城象嵌鐔だけでなく、応仁鐔（切羽台と耳の間を線象嵌で囲み、その外側部分に何重かの規則的な点象嵌を施す）や、与四郎象嵌鐔（小池与四郎在銘品が基本で丸形の孔を4〜8個程度開け、そこに紋や草花や各種文様を象嵌し、周りにも唐草文様などを象嵌する）が存在する。これらは室町時代〜江戸時代初期に製作されたと推測されているが、真鍮の普及が背景にあると考えられる。今回、真鍮国産化の歴史を調査し、その過程で斯界では知られていない近江日野の真鍮象嵌鐔の名鐔工に関する資料に出会ったので紹介したい。

1. 真鍮象嵌鐔の名作

この鐔は無銘であるが、鉄地に真鍮象嵌で枝牡丹を華麗かつ写實的に彫り上げている。周りの土手耳には桔梗（中には花卉が4枚で桔梗とは思えない花も交じる）と唐草を隙間無く象嵌している。これらは写真というより装飾文様の位置づけだろう。これだけ密な彫で埋め尽くしているが、うるさくなく、品も良い。鐔の表裏は同構図で、表には牡丹花4輪、蕾4つ、裏には牡丹花3輪、蕾4つで、枝振りに若干の変化があるだけだ。

形は長丸形で、法量は縦88・5mm、横81・4mm、土手耳厚5mmと大きい鐔である。地鉄の状態が観られる箇所は切羽台と、枝牡丹の根元の形に合わせて残した部分しかないが、輝きもある良い地鉄である。

鐔の造り込みにおける土手耳は、室町時代の古甲冑師鐔と分類される鐔にみられる。また小柄、弁用の櫛孔が開けられていないことも時代が上がることを示している。



枝牡丹の周囲には細かい点象嵌も鑲めてあり応仁鐔を彷彿させる。
枝牡丹は鉄地を残して根元部分を表現してから彫り上げているが、古金工、古美濃と分類されている鐔にも根元から彫った梅樹などの象嵌があり、同時代の絵柄の特色と考えられる。
裏の枝牡丹象嵌の真鍮は少し赤味が強い箇所もあり、銅の含有量の差と思われ、初期の真鍮とも思われる。

伊藤 三平

2. 同作者（同工房）と考えられる真鍮象嵌鐔

このような名鐔であり、同作者のものが諸書に紹介されていないかと探すと、『楽しい真鍮象嵌つば…100鐔』（大谷定夫著）に同作者（工房）と考えられる鐔が3枚所載されていた。その一枚が左図上である。この鐔には真鍮覆輪も施されているが、法量は縦88・6mm、横82・9mm、耳厚4.9mmと大差が無い。絵柄、鐔の造り込みも同一である。

また『鐔（つば）』（小笠原信夫著）に土手耳部分の象嵌が御題目に変わった「枝牡丹経文象嵌鐔」（左図下…法量は未記載）が所載されていた。

①鐔全体の形状、②土手耳の形状、③切羽台の形状、④櫃孔が無いこと、⑤真鍮象嵌された枝牡丹の彫の作風、⑥枝牡丹の彫の間に施された真鍮点象嵌が、同作者（工房）であることを物語る。



3. 平安城象嵌鐔とは

平安城象嵌鐔とは、鉄地に真鍮で、主として草花模様を象嵌した鐔である。無銘が大半だが、中に「平安城」「山城国」を冠する在銘品があり、それが平安城象嵌の名称の由来である。作者銘を『鐔大観』（川口陟著）、『刀装小道具講座5京都金工編』（若山泡沫著）、『刀装・刀装具初学教室（18）』（福士繁雄著）、『刀剣美術467号』の諸書から抜き出すと、長吉、宗利、忠正、正則、信光、正秀、吉長、吉久、吉家、政重、貞次、盛重、喜任、喜利、喜一、忠幸、寛忠、康村、義光、定家、光広、往久、重真、重信、重幸、教重、宗利、貞長、貞信、政広、重光、重幸、正秀などが挙げられている。

製作時代は室町末期、安土桃山、江戸初期～前期までと先人は幅広く推測されている。

4. 真鍮の普及

平安城象嵌鐔、応仁鐔、与四郎鐔の流行には真鍮の安価・増産が欠かせない。日本における真鍮普及の歴史を『近代日本の伸銅業―水車から生まれた金属加工』（産業新聞社編著）、「銅ものがたり」（社）日本銅センター）における「しんちゅう由来記」（和田忠朝著）などからまとめると次の通りである。

① 黄銅（真鍮）は、銅と亜鉛の合金で黄金より価格も安く、展性（金属を打ち伸ばして箔状に広げられる性質）もあり加工しやすく、錆びても磨けばすぐに元の色に戻る特性は重宝された。紀元前1世紀に中央アジアの南コーカサス地方で製造法が発見され、1世紀にはローマ帝国で貨幣になる。インドにも伝来し、中国には11世紀中頃に伝わる。

② 日本には仏教に必要な仏具として中国より渡来していたが、16世紀末までは宣徳銅と呼び黄金の代用として輸入され、珍重されていた（宣徳は明の宣徳帝在位時代の年号で日本の応永33（1426）～永享7（1435）年に該当する）。

③ 日本での製造は、伝承も交じるが、広徳寺（滋賀県甲賀郡水口町山上→現在は甲賀市）の近くに住んでいた藤左衛門が、寺の庚申尊に文禄2（1593）年に参籠断食七日間、家運の隆盛を祈願。満願の日に童子が現れ、銅にトタン（亜鉛：輸入品）を混ぜる合金の法を細かに伝授。これが我が国の真鍮製造の始めとされる。彼は慶長4（1599）年に京都に出て、本格的に製造を始めた。（中西義孝氏は「水口郷土史」で、安政年間の『甲賀史略』を参考にして、藤左衛門は京都で銅で鉦を製作していた職人で、より良い音色を探す過程で真鍮に目を付けたのではという説）

④ 藤左衛門は巨万の富を得て、元和2（1616）年に報恩の為に、広徳寺の本堂を再建する。なお本堂は伊勢湾台風で大きく損傷したので全国の伸銅メーカー、伸銅品問屋、故銅問屋の有信者多数が数百万円の浄財を寄進し、昭和35年に再建されている。

応仁（1467～1469）年号を冠して分類されている応仁鐔が、高価な輸入品の宣徳銅を使用している可能性もあるが、真鍮象嵌鐔は真鍮国産化

が始まった安土桃山時代（特に1600年以降）から多く造られたと考えるのが無理が無い。

5. 近江国日野の日野鐔、與次郎、與十郎象嵌

真鍮国産化に成功した藤左衛門の滋賀県甲賀郡水口町山上と15km程度の距離に、蒲生氏郷の城下町だった日野がある。今は人口2万人程度の町だが、鉄砲産地としても国友、堺に並ぶ地で、江戸時代には近江商人の一派の日野商人を輩出した地である。

『近江蒲生郡志』五の「第二編 工業志」第三節に以下の記述がある。

「既に刀剣工（筆者注：安友 住す。粧具鐔工も在住せしを疑わず、鐔には日野鐔の称あり、一説に與次郎なる者象嵌を施せし一種の鐔を製作す。與十郎象嵌はなりという。佐々木氏の城下にも刀剣装具工あるべきは勿論なり。小柄も刀工と粧具工と相合して完備す。文禄元年蒲生氏郷が征韓従軍の為に会津より上りて本郡武佐駅（筆者注：近江八幡市の南東部）に至りし時、日野の宿老等が日野の小柄を贈りて慰問せしは日野製の小柄あるを証すべし。」

以下に江戸時代中期以降の日野の金工・飯島清左衛門のことが記されている。なお『近江日野町志 巻中』にも同様の記述があるが、そこに「金鍔奇形に曰く「長次は近江日野の人、通称與次郎といふ。故に今真鍮象嵌を與次郎象嵌という。別に與四郎象嵌というあり」という一節も記されている。ちなみに長次は3章で挙げた確認されている平安城象嵌鐔の銘には無く、「金鍔奇形」も確認できないが、『金工事典』には「長次 与次郎という。真鍮象嵌入り工法の祖と一本にある。近江国日野住。江戸時代初期」とある。真鍮象嵌工として与四郎（在銘品では與は使わず与を使う）が名高いが、この記述にある與次郎、與十郎象嵌は与四郎の誤記なのであるうか、あるいは日野の與次郎、與十郎が名高かった為に、後世に与四郎と名乗る鐔工が登場したのであるうか、興味深い。いずれにしても「日野鐔の称あり」とあるように当時は名高いブランドであったと考えられる。

おわりに

Ⅰ 黄金文化の時代、

鉄砲の金具需要、牡丹図の絵画Ⅰ

この時代に真鍮需要が旺盛（藤左衛門は20年も経たない内に巨万の富を蓄積して広徳寺の本堂を再建）になった一因に、黄金文化が花開いた安土桃山時代の風潮もあつたことは否めない。安価で、磨けばすぐに黄金色に戻る真鍮は金の代用品として喜ばれたに違いない（今は鐔の真鍮象嵌を磨くと、古色を損なうと止められるが、往時は常に磨いて黄金色に輝かせていた武士も多かったと思う）。

もう一つ、鉄砲の普及も大きく関係しているのではと考える。鉄砲は伝来後に瞬く間に軍事革命を引き起こし、織田、豊臣、徳川の統一政権を作り上げた。この鉄砲の「カラクリ」（引き金、用心金、火皿、火蓋、地板、火縄鉄、銅金、雨覆いなどによって構成）に真鍮製が優れていたと言う史料がある。大坂夏の陣に備えて慶長20（1615）年に掘丹後守直寄（道明寺の戦いで後藤基次を破るなどの武功を上げる）が近江日野の鉄砲職人に鉄砲300挺の製作を命じた注文書の七条目に「かなこしんちゅう上々、但、いづれも丈夫に可仕候」（金具は真鍮が上々であるが、いづれも丈夫に仕上げる可）と書かれている。鉄砲の「カラクリ」には当初は別の銅合金（京都山崎からの発掘資料には20%銀を含むものがあり、石見銀山遺跡からは銅、錫、鉛の青銅合金のものがある）が使われていた。牡丹は古くから愛好された花であるが、同時代では狩野山楽（永徳弟子）の「牡丹図襖」（大覚寺・重要文化財）が咲き誇る枝牡丹を華麗に描いている。狩野山楽は浅井長政家臣の木村永光の子で、近江蒲生郡の生まれである。この鐔の作者が日野名工與次郎（與十郎）であれば、同郷のよしみで山楽に下絵を依頼したと考えるのは考え過ぎであらうか。